

Title	内陸アジア言語の研究 XI 裏表紙
Author(s)	
Citation	内陸アジア言語の研究. 11
Issue Date	1996-07
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/21856
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『内陸アジア言語の研究』執筆要項

1. 本誌は、中央アジアと中国を中心に東は東北アジアから西は黒海沿岸にまで広がる中央ユーラシアの諸民族が用いる様々な言語、及びその言語で書き残された古代～近代の文献資料（出土文書・碑文・宗教典籍など）を、言語学的あるいは歴史学的に扱う論文を掲載するものとする。
2. 原稿は未発表のものに限る。ただし口頭発表したものはこの限りではない。
3. 原稿の長さは自由であるが、論文の場合、刷り上がり状態で20ページ（400字詰め原稿用紙に換算して50枚）を一応の目安とする。ただし数ページ程度の研究ノートや資料紹介の類も歓迎する。
4. 原稿は完全原稿の形で提出されたものを、フロッピー入稿で受け付ける。特に30ページを越えるものについては、経費軽減のため、マッキントッシュにて割り付け済であることを原則とする。
5. フロッピー入稿について
 - 1) マッキントッシュの場合
組版は Macintosh の Adobe PageMaker-J を用いて行なうので、執筆者は統一書式に則って、ページメーカーにて割り付け済の原稿をフロッピー入稿されるのが最も望ましい。割り付け時のスタイルなどを指定したテンプレートや組方規則、外字フォントなどのソフト面については、編集部に用意してあるので相談されたい。
 - 2) MS-DOS テキストファイルの場合
「一太郎」など、MS-DOS テキストファイル形式でフロッピー入稿される場合は、必ず2DD フロッピーディスクを使用すること。その際、フロッピーとともにワープロで印字した完成原稿を添付し、ワープロにない漢字・記号などの部分は、当該箇所を空けて朱筆で指示する（旧字体への変更指示も必ず提出稿の段階で付けること）。本文中の註番号は、該当箇所に(1)のように通し番号を挿入する。以上はあくまでも原則である。不明な点は編集部にお問い合わせされたい。
6. 書式として、以下の統一方針を定める。
 - 1) A5版横組み奇数頁起こしとし、本文は35字×27行、脚註は38字×40行とする。
 - 2) 原則として脚註形式とし、引用文献は論文末尾に一括掲載する。
 - 3) 句読点は「、。」を用い、「、。 」は用いない。
 - 4) 地の文にはつとめて当用漢字・新かなづかいを用い、旧字体・旧かなづかいの使用は引用文等で必要な場合のみにとどめる。
7. 論文末尾に執筆者の所属・肩書、表題の英訳、執筆者名のローマ字表記を付けること。
8. 原稿の締切日は毎年12月31日とする。
9. 校正については、初校は著者校正とし、再校以降は原則として編集委員の責任とする。校正はあくまでも誤植の訂正にとどめ、原文の増減は認めない。
10. 抜刷は作成しない。執筆者には本誌10部ずつを献呈する。

執筆者

Peter Zieme

Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften,
Akademievorhaben Turfanforschung 研究員 古代トルコ文献学専攻

沖 美江

大阪大学文学部卒 東洋史学専攻

伊 斯拉 菲 爾 玉 蘇 甫

新疆維吾爾自治区博物館副館長 古代トルコ文献学専攻

海 老 澤 哲 雄

帝京大学文学部教授 東洋史学専攻

宇 野 伸 浩

広島修道大学商学部講師 東洋史学専攻

武 内 紹 人

京都教育大学助教授 言語学専攻

坂 尻 彰 宏

大阪大学大学院生 東洋史学専攻

小 田 壽 典

豊橋創造大学教授 東洋史学専攻

内陸アジア言語の研究 XI

1996年6月26日 印刷

1996年7月10日 発行

責任編集 吉田豊 (神戸市外国語大学)
森安孝夫 (大阪大学)

〒560 大阪府豊中市待兼山町1-5
発行者 中央ユーラシア学研究会
(大阪大学文学部森安研究室)
電話 06-850-5103

〒606 京都市左京区吉田神楽岡町8
取扱店 株式会社 朋友書店
電話 075-761-1285

〒440 豊橋市向山台町10-10
印刷所 有限会社 中部ワードサービス
電話 0532-55-8503

STUDIES ON THE INNER ASIAN LANGUAGES XI

P. Zieme : A Fragment of the Chinese <i>Mañjuśrīnāmasaṅgīti</i> in Uigur Script from Turfan	1
M. Oki : A Few Characteristic Features of the Uigur Alphabet in the 9th–11th Centuries	15
Y. Israfel : Wooden Axis of the Statue of Buddha with Inscription in Ancient Uigur	61
T. Ebisawa & N. Uno : <i>Hystoria Tartarorum</i> Written by C. de Bridia. Japanese Translation and Commentary (2)	67
T. Takeuchi : Old Tibetan Manuscripts from East Turkestan in the Stein Collection — the Cataloguing Project —	121
Review	
T. Takeuchi : <i>Old Tibetan Contracts from Central Asia</i> , Tokyo 1995. by A. Sakajiri	139
<i>Tibetan Archaeology and Manuscripta Orientaria</i> : Two newly founded journals. by T. Takeuchi	151
Bibliography of Juten ODA	153

The Society of Central Eurasian Studies

1 9 9 6